



「医療ドラマはこうしてつくられる」



《語り手》

株式会社共同テレビジョン 制作センター 第1制作部
プロデューサー 小林 宙：助監督 紙谷 楓

《聞き手》

東京通信病院 病理診断科／日本医科大学客員教授
田村 浩一

収録：2020 年 10 月 於：栄研化学株式会社



田村 月刊青年漫画誌「アフタヌーン」に連載されている『フラジャイル』という、病理医を主人公にした漫画をご存知でしょうか？^{注1)} フジテレビ系でドラマ化されて2016年1～3月に放映され^{注2)}、私はその医療監修を担当させていただきました。脚本の準備段階から終了後の打ち上げまで、半年以上テレビドラマの制作に関わったのですが、ドラマが出来上がっていく過程を現場で見ていると、テレビで

観ているだけでは決して分からないことが数多くありました。

これはぜひ本誌の「わだい」のコーナーで取り上げたいと思ったのですが、ドラマの制作は記事を執筆していただく時間がなかなか取れないお仕事です。そこで「モダンメディア」としては初めての「座談会」以外のインタビュー記事を企画し、『フラジャイル』で密接にお付き合いさせていただいて、現在も親交のあるお二人にお越しいただきました。今日は一般読者が知らないドラマづくりでの苦労話や裏話を大いに語っていただこうと思います。

I. まずはお二人のお仕事の紹介から

田村 ドラマのエンディングなどで、出演者の名前に続いて制作スタッフの名前と肩書がテロップで流れますよね。しかし素人がみると、肩書をみても実際に何をしている人なのかが分からないものが少なくありません。そこで、テロップで流れるそれぞれの肩書の方の仕事の内容を簡単に表にさせていただきました（表1）。読者の皆さんにはこれを参考にしていただくことにして、まずはお二人の仕事内容を詳しくお聞きしていこうと思います。

それでは小林さんから、どういうお仕事をなさっているのかを教えてください。

小林 僕はドラマのテロップで最後のほうに名前がでてくることが多い、プロデューサーをやっています。番組の責任者で、よく「大枠をつくる人」と言われるのですが、企画、脚本づくり、俳優さんのキャスティングと、スタッフの人選もします。監督を決めるのも、一応プロデューサーではあります。それに加えて、制作費の予算管理などもするのですが、監督のほうが世間的には有名なもので、一般の方にはちょっと分かりづらいかも知れません。

よく、監督とプロデューサー、どちらが偉いのかと聞かれるのですが、それはどっちもどっちなんです。たとえばプロ野球でフロントと監督がいますよね。ドラマ制作で言うと、フロントが僕で、監督は監督ということになります。長嶋監督のときはフロントより長嶋監督のほうが偉そうですが、長嶋監督のクビを切る権限はフロントが持っている、しかしフロントが監督の意向どおりに選手を採りに行ったりもします。われわれの業界でも結局はお互い相談しながらなので、どちらが上というよりは、人によるという感じですね。うまく監督と連携を取って番組全体をつくっていくという仕事をしています。

普段の生活で言うと、基本的には、僕は1年に1本連続ドラマをやって、1本単発ドラマをやる、という感じで、だいたい1年間の仕事が埋まっています。撮影がないときは企画を考えたり、本を読んだり、そういった何か芸術家みたいなことをしています。

田村 なぜプロデューサーという道を選ばれたのですか？

小林 なぜかと言われると、特にそんなにこだわり

もなく、単純にドラマが好きで、なんとなく就職活動をしていたら、この会社に入ったというところでしょうか。共同テレビという制作会社ですが、映画もやりますので、今日一緒に来ている紙谷も次は映画を撮ります。だから、映画とかドラマとかにはあまりこだわりもなく、単純に共同テレビのドラマが好きだったことがありつつ、この業界を選んだという感じです。

田村 なるほど。監督とプロデューサーの役割について、自分の中でも最初はこんがらがっていたのですが、『フラジャイル』では監督が2人いて1話から交代で撮っていたじゃないですか。でも1話から10話までのドラマ全体を通したストーリーがありました。ということは、各回は担当の監督が撮るといっても、全体の流れとしては小林さんがつくっている、制作と一緒に参加してみて「そういうことなんだな」と思いました。監督がいて、プロデューサーがいて、実際に撮影する現場は監督が仕切っているというの、今のお話でよく分かりました。

では次に紙谷さんのお仕事を。

紙谷 私は助監督、番組によっては監督をやらせてもらっています。私としては、ドラマは正直、プロデューサーの力が強いものだと思っていて、プロデューサーが企画して、キャスティングなどもして、監督の意見も入りはしますが、つくり上げたものを現場で料理するというか、それをするのが監督の仕事かなと思っています。

だから、結局『フラジャイル』で助監督をしたときも、（小林）宙さんと、病理に関してはすごく相談してやっていました。監督というよりは、宙さんと私と田村先生で話し合って、ということが本当によくあったと思います。

例えば現場で、検査技師の森井役だった野村周平さんに、標本作製の動きや演技を指示するというのは監督がやるわけです。ということは、監督の下の方（助監督）がプロデューサーの意向まで全部分かっていなければいけないというので、それを私が担当させていただいていたのです。まあ、枠組をつくって、現場で処理するみたいな仕事ですね。

田村 そのコンビの意思疎通がちゃんとしていないと、やっぱりどこかでおかしくなりますよね。

小林 はい。

紙谷 だから「これをしてほしい」「これをしなけ

表1 『フラジャイル』（フジテレビ、共同テレビ）の主なスタッフの仕事

制作スタッフ	
フジテレビ	
編成	テレビ局で、どの時間帯にどういった番組を放送するのかタイムテーブルを決定し、番組の制作費を分配したり、予定通りに番組が放送されるようにサポートを行ったりする。
制作	テレビ局のドラマ制作を担当
広報	テレビ局の広報担当
ホームページ	テレビ局の番組ホームページ作成担当
共同テレビ	
プロデューサー	ドラマ制作の総責任者
プロデューサー補	プロデューサーの補助
演出（ディレクター）	監督
演出補（AD）	監督の補助
制作	ロケ場所探し・セッティング、弁当手配、車両の手配、通行人など一般の方のケア、その他撮影に関するいろいろなことをする。
記録	撮影シーンの様子や内容、そのシーンの尺（カットやシーンの時間）を管理。出来上がった映像の「つながり」もチェック（たとえばカット割りの途中で髪型がかわってしまっていないかとか、朝は雨で持っていたはずの傘を、雨が止んだ夕方方でも持っているか、など）。
スチール	番組の公式写真撮影（番組のHPの写真や、ドラマ内で使用される劇用写真の撮影など）。
タイトルバック/CG	オープニングタイトルや、シーンの中で必要なCGを担当。
技術スタッフ（別の専門会社）	
技術プロデューサー	技術関係の責任者。「技術」にかかる予算やスタッフの手配、管理。
TD	テクニカルディレクター：番組の全体的な絵の方向性を決める。スタジオ撮影時、数台のカメラで一気に撮影するため、どのタイミングでどの絵を使用するか決める。
撮影	メインのカメラマン
スタジオカメラ	スタジオで、何台かのカメラで同時撮影する、メイン以外のカメラ。
映像	複数のカメラで撮影したビデオの画調合わせや、映像の画像調整を行う。
音声	全ての音（セリフ、周囲の音など）の録音を担当。
照明	ドラマのセットやロケなどで、全ての照明を担当。
編集	録画したものの編集：担当者が編集したものを監督が確認し、調整していく。
ライン編集（本編集）	撮影した画像を編集。カットを割って細かく撮影した絵をつなぎ、画質や色などを調整する。
MA	Multi Audio：編集したものの音の調整。セリフにBGM・効果音などを加え、音質やバランスを調整、音の最終仕上げを行う。
選曲	番組中で使う曲の選択を行う。
音響効果	ドラマの中のさまざまな音（波の音とか虫の声とか）を制作する。
美術スタッフ（それぞれの専門会社）	
美術プロデューサー	美術関係の責任者、スタッフ調整、お金の管理などもする。
デザイン	セットのデザイン（スタジオ、ロケ地とも）を担当。
美術進行	現場で美術関係者を統括
大道具制作	スタジオセットを建てる、大工的役割を担当。
大道具操作	スタジオの可動式の壁を必要に応じて外したりする、という操作係。
装飾	セットやロケ地での、必要な装飾する。
持道具	俳優が持つ（身に着ける）道具の用意をする。
衣装	俳優の衣装を用意する
スタイリスト	俳優個人に付いて、衣装その他を調整する。
ヘアメイク	俳優の髪型、メイクを担当。
アクリル装飾	アクリル樹脂を使う装飾全般（セットの床張りなどを含む）を扱う。
建具	和風物（障子、ふすまなど）、セットの窓、ドアなど、開閉するものをセットに合わせて発注したり、作製する。
電飾	セット内の電飾を担当
視覚効果	ビジュアルエフェクト（VFX）：撮影済みの映像に二次的な効果を加える（例えば実際には雷をつくったりするが、今はCGが主流になっている）。

ればいけない」というのが、宙さんの場合は分かりやすいので、やるべきことが明確に伝わります。ただ、あいまいにする人もいて、それだと監督もあいまいになって困るということがあるので、やっぱりしっかりとやるべきこと、やりたいことがプロデューサーにちゃんとあれば、現場はスムーズだと

思います。

田村 ああ、それは医療現場も似たところがありますね。上に立つ者が、考え方とか方針をしっかりと示さないと、医療チームに混乱を生じますから。

そもそも紙谷さんはなぜ、監督を目指したんですか？

紙谷 私もドラマと映画が好きだったんですけど、なぜでしょう？　なんでプロデューサーではなくて監督…。でも宙さんも、もともと監督志望で入っていますからね、演出ですものね。

小林 僕、本当に素人に入ったので、プロデューサーと監督の違いも分からず、結局、どっちでもよかったのですが、世間的に言うと監督しか知らないじゃないですか。「監督、カッコいいなあ」と思って入った結果（笑）。

それで僕も以前、紙谷が『フラジャイル』のときにやっていた助監督というのをやっていたのですが、「おまえ、助監督に向いてない」って、2年でクビになって、今の道を歩んでいるだけなので、残念なことです（笑）。

田村 医者の世界でも、外から見ているのと実際にやってみるのは違うし、やって面白ければ、そのまま進んでいってしまうこともありますね。学生のときに言っていたのと全然違うことをしている仲間も結構いるので、なんとなく分かります。

紙谷 私も監督がカッコいいなと思ったのです。日本の映画やドラマって、最後は「監督〇〇」じゃないですか。それにあこがれて、「監督志望です」と言ってしまったのですが、でも、実際に現場のほうに合っていると思いました。

小林 カッコいい。俺、合っていないだよ。

紙谷 合っていないでしょ、宙さんは絶対。プロデューサーのほうに合っていると思いますよ。

小林 朝、起きられないし（笑）。

紙谷 宙さんはすべてを上から統括しているほうが合っていて、私は現場で走り回っているほうが好きだなんて。10年ぐらいやって、今も思うので、たぶん今の仕事が自分に合っているんだと思います。

Ⅱ. ドラマの企画から、それが実現するまで

1) 企画のつくり方

田村 では次に、ドラマはどのように企画が生まれて、実現していくのかをお聞きしたいと思います。

モダンメディアは読者の多くが医療従事者なので、医療ドラマの話にある程度限ってお話を伺います。一般的に医療ドラマだったらほとんど何をやっても当たるのか、外れることもあるのか。また、な

ぜ『フラジャイル』を選んだのかも知りたいところですよ。

医療ドラマを企画するときに、どこからネタを取ってくるのでしょうか。たとえば『コード・ブルー〜ドクターヘリ緊急救命』^{注3)}は？

小林 オリジナルですね。

田村 では、原作があるもの、ないものも含めて、企画を立てていくところのお話からお願いします。

小林 まず『フラジャイル』で言うと、『フラジャイル』はフジテレビがやりたがったのです。なぜやりたかったかと言うと、おそらく、医療ドラマは視聴率を取りやすいというのが理由の一つでしょうね。テレビ業界、ドラマ業界では、医療ドラマと刑事ドラマは数字を取りやすいと言われています。医療ドラマでは「命を救う」という一つ明確なテーマがあって1話1話で完結できるし、刑事物は「犯人を捕まえる」というテーマで分かりやすく1話1話つくれるので、たぶん、視聴者も見やすいのだと思います。

また、お医者さんと刑事というのは、なんとなく身近に想像ができるところにいるので、親しみもあるし、それでいてヒーロー物にもできるから企画しやすいのです。結果として、医療ドラマが多くなってしまうときもあるし、刑事ドラマが多くなってしまうときもあります。

1クールで他局がかぶってしまうことがよくありますが、あれはたまたまです。今クールで刑事ドラマが多かったら、来クールは医療ドラマが多いというの、たまたまそうになっているだけです。

田村 ふたを開けて「エッ」と思うことはありますか？

小林 あります、あります。

『フラジャイル』の企画に関して言うと、「病理医」という医者の存在を知らなかったというか、あまりメジャーではなかったのも、それが面白かった。それから、オリジナルをつくるというのは、なかなか企画が通りにくくて、原作（漫画）があるほうが、すでに物語がある程度できているので、企画が見やすいのと、ちょっと保険が効きやすくて、企画が通りやすかった。これは局とか、今は配信も多いですが、そういったビジネス的な観点から、企画が決まっていくということですね。

僕らは制作会社なので別に枠を持っているわけで

はなく、電波も持っていないくて、配信もしているわけではないので、いつもやっているのは「こういう企画があります」という話を局や配信会社に持って行き、「じゃあ、ドラマ化しましょう」ということになる。また、局や配信から「こういうドラマができませんか」と求められることもあります。それで企画を持って行って通る、ということも多いように思います。

局も制作体制を持っていますが、それだけでは足りないの、制作会社に落としていくということもあります。そんないろいろな方向性がある、ドラマがつくられていくわけです。

田村 例えばフジテレビで「医療ドラマでいきたい、何かいいのはない？」みたいな、漠然と振ってくることはありますか？

小林 あります。ただ、「医療ドラマ」というくくりで下りてくることはあまりなくて、例えば「30代の女性の仕事物」のようなくくりです。「仕事物」の中には医療ドラマが含まれるし、刑事ドラマも含まれるし、「ラブコメではない」とか、視聴者がどこを望んでいるかによって企画を立てていく、そういう依頼が多いですね。

田村 原作がない場合、プロデューサーが企画して、脚本家まで決めていくのですか？

小林 そうですね。脚本家の名前はすごく重要で、脚本家によってキャストが決まったり、決まらなかったりするの、いい脚本家を採りたいんですよ。特にオリジナルの場合は脚本家の名前がないと、企画も通りにくい。「この人が書いてくれます」という前提があると通る、という感じがします。

田村 その企画を採用するかどうかは、誰が決めるのですか？

小林 どのテレビ局もそうですが、局には制作と編成という部署があります。編成というのは一日のラインナップを決める部署で、そこが局の頭脳なのですが、この編成のトップが決めます。連ドラというのは大きい枠ですし、深夜ドラマとかではなく、ゴールデンタイムの連ドラというのは一番上の決済が必要なので、基本的には編成局長といわれている人が最後にハンコを押す感じですね。もちろんドラマ担当のトップもいますが、やはり局としてこれを選ぶ、という感じでしょうか。

田村 あるシーズンで、みんながいくつか企画を出

して競合する感じになるのですか？

小林 そうです。

田村 その中から局が選ぶとなると、説明に行くこともあるのですか？

小林 あります。うちは一応フジテレビの子会社でもあるので、例えば僕は2021年4月期の連ドラをやる予定ですが、それはフジテレビとうちが話をして、1年前ぐらいから「小林でやる」と決まっていた。その上で僕が企画を持って行って、それを通して、「これでやりましょう」ということになるわけです。

田村 そうすると、早いと1年前には決まっている感じですか？

小林 今はもっと早くなっています。働き方改革もあって、台本を早く仕上げて、準備も早くやって、という体制にどんどん変わってきています。

フジテレビは今まではすごく遅くて、連ドラでは、2、3か月前でも企画が決まっていなかったというようなことが本当にあったのですが、今はそういうのはなくなってきました。

2) 撮影が始まるまで

田村 『フラジャイル』のときは僕の所に医療監修の話があったのが8月、いろいろ動き始めたのは9月末ぐらいで、最初の脚本をつくるだけで1か月近くかかって、実際にクランクインしたのは11月でした。普通は、だいたいどんな手順で進んでいくんでしょう。先ほど、早いものは1年以上前という話がありましたけれども、役者さんのスケジュールもあるので、撮影が始まるのは放映のだいたいどのくらい前なのでしょう？

小林 今は働き方改革で変わってきていますが、昔は放送の1か月前にクランクインして、放送の1週間前ぐらいまで撮影するみたいな感じが本当に多かったですね。

『フラジャイル』に関して言うと、主演の長瀬さんが年末年始、ジャニーズの行事が忙しかったり、映画のプロモーションがあることも分かっていたので、ちょっと早めに入ったんだと思います。放映は1月だけれども11月には撮影に入ったと思いますから、普段より1か月ぐらい余裕を持って、撮影期間中でも休みが多かった感じです。

田村 逆に、撮影が延びてぎりぎりになると、どの

くらいのところまで詰め込んで放映することがあるものでしょう？

小林 僕が覚えている中では、『泣かないと決めた日』が^{注4)}、土曜の深夜というか、日曜の午前3時とか4時に最後の撮影が終わって、火曜日に放送だったかな？

紙谷 72時間ぐらいしかなくて。

小林 そう、時間がなくて、すごい編集が大変だった気がする。

紙谷 撮影が終わってからの編集。私もそれが一番大変だったと思います。

小林 でも、噂を聞くともっとすごいところがありますよ。放送日の午前中まで撮っていたとか。

紙谷 それって、どうやっているのか分からない。

小林 恐らく局もギリギリまで待っているんでしょう。

紙谷 そうですね。

小林 それで、ほとんど生放送みたいに出しているのでしょうかね。

田村 なるほど。

小林 放送事故にならないのがすごいなと思いますけど。

田村 僕にとっては、『フラジャイル』も最終話のとき^{注5)}なんて、強烈な印象でしたが。

小林 でも、『フラジャイル』はそこまで大変ではなかったですよ。

田村 しかし、僕のところに脚本の最終の直しの依頼がきたのが、締め切りの直前で。

小林 すぐ入れなければ駄目ですね。

田村 徹夜で直しを入れて、日曜日の朝6時ぐらいにメールで送ったら、10時に印刷所に出したとか(笑)。

小林 確かに最後のほうはそういう感じでした。

田村 そういうノリだったし、撮影も土曜日の夜中というか、クランクアップが午前1時過ぎぐらいで、水曜日の放映だったので。そのときに僕も現場にいたし(笑)。

小林 そうか、そうか。あれは最後はバタつきましたね。

紙谷 確かに最後はバタつきました。

田村 あときはエンディングに使う桜のシーンを撮りたかったのに、天気が晴れなくて、日中の撮影が延びたと言っていましたね？

小林 あとは最後だからゆっくり、もはやそんな感じで(笑)。クランクアップの最後のシーンも、なんか、ゆっくりやっていたし。

田村 病理解剖のシーンを撮影するので、赤羽の貸スタジオに夜7時くらいまでに来てほしいと言われて、行ったらわずかなスタッフしかなくて、待っていたけど「来ねえな」とかって思って。

紙谷 押して、押して、押してですね。

小林 あのスタジオはすごく寒いイメージしかないですね(笑)。「すげえ寒いな、ここ」「早く終わんねえのかな」って、ずっと思っていた(笑)。

紙谷 懐かしい(笑)。

3) 俳優やスタッフの人選は？

田村 俳優なども、プロデューサーが決めていくんですね？

小林 そうです。

田村 制作スタッフは、小林さんが率いるチームみたいな感じで、だいたい決まったメンバーというのはいるのですか？

小林 人によってはいるのですが、僕はあまりいません。言われた人を「ハイ」「ハイ」と言って採っています。あまり好みがないというか。

田村 誰とでもできる。

小林 そう……、分からないですけど、そうですね。

紙谷 でも、人によってはいますよ。チームがちゃんとあってやっている人もいます。共同テレビじゃなくて、ほかの制作会社とかで。

田村 『フラジャイル』の場合、主演は長瀬さんでしたが、使う役者の条件みたいなものが最初に決まってくることはあるのですか？それとも企画が決まってから選ぶのですか？

小林 もちろん、条件はあります。以前は、「2年先の◇◇の枠の主演は〇〇」というふうに決まっている場合があって、「〇〇で企画を立てろ」とか、そういう依頼もありましたが、今は少なくなりました。やはり企画がどういうものかが重要なので、この企画で、この人に出てほしいという感じになっています。

田村 企画に合う人をあとから選ぶ？

小林 どの局も、今は企画優先になってきています。

4) スタジオセットやロケ地について

田村 次に医療ドラマのセットについてお聞きした

いのですが、『フラジャイル』のときには医局（病理診断室）とそれに隣接した小さな標本作製室だけつくっていました（図1, 2）。どこまでつくるとい
うか、シーンが多ければつくってしまうのですが、手術室などもつくることあるのですか？

小林 『ドクターX～外科医・大門未知子～』^{注6)}は手術室のセットをつくっているのではないしょうか。フジテレビだと『医龍 Team Medical Dragon』^{注7)}はつくって
いました。本当にちゃんとしたセットをつくっていて、医療従事者の方が見たらどうか
分からないですが、ちゃんと手術シーンをセットで撮れるようにつくっている場合もあります。

田村 そうすると、セットでも結構お金がかかりますね。

小林 はい、かかります。

田村 その予算の配分というか、「このドラマだっ



図1 病理診断科の部屋のセット

左奥に映っているソファの向こうでガラス張りにみえる
中が標本作製室になっている。画面には写っていないが、
右奥に宮崎の机、右手前に岸の机がある。



図2 標本作製室のセット

サクラファインテックジャパン（株）の協力で、狭いながら
も実際に標本が作製できる設備が整っている。

たら、ここまでつくれる」といったことも最初の企
画で決まっていくわけですか？

小林 そうです。

田村 フジテレビの湾岸スタジオの建物（図3）
だって、そんなに広いわけではないですよね。どの
ドラマだと、どのくらいの面積を使うとか、そうい
う割り振りというのはどうなんでしょうか。

小林 あのビルの中にいくつかのスタジオがあるわ
けですが、スタジオによって大きさが違います。連
ドラなどでは、あるスタジオがあてがわれて、それ
で収まるようにつくっていくという、パズルみたい
なものです。

それで、おっしゃるとおり台本上、分量が多いシー
ンはセットを建てます。優先順位を決めて、セット
を建てたら、そこを使えるように台本をつくって
いきます。つまり、台本に合わせてセットをつくる、
セットに合わせて台本を変える、どちらもあるの
ですが、基本的に撮影量が多そうなところのセット
をつくっています。

田村 出来上がったセットに合わせて、台本を少し
変えていくこともあるわけですか？

小林 そうです。

田村 だからうまくいくんですね。

では、ロケ場所は、どのように選ぶのですか？

紙谷 ロケ場所は、ロケ場所を決める制作部がいま
す。その人たちが監督と話し、台本を見て、もちろ
んプロデューサーと予算も考えて、ピックアップし
てくるという感じです。

田村 それはいくつか、そこだったら大丈夫みたい
なところはあるのですか？



図3 フジテレビ湾岸スタジオ

ゆりかもめ、テレコムセンター駅から撮影。遠くに
FCGビル（フジテレビ本社ビル）が映っている。

紙谷 結構ロケもやっていますし、ロケスタジオという、それこそ、あの『フラジャイル』の最終日の…。

田村 赤羽にある閉院した病院がそのまま貸セットとして使えるようになってきているわけですね（図4-1, 2）。あれはびっくりしました。

紙谷 解剖室をスタジオにつくることもありますし、病院をつくっているところもあります。

田村 病院も本当に、どのドラマでも同じ病院だなと気づくことが結構あります。

紙谷 たぶん貸してくれやすいとか、ドラマをやらせてくれるという施設が、それぞれの局で違うんじゃないですか。病院によっても、会社によっても違いますし。だから使いやすいところに行っちゃって、同じところになりがちというのはあります。ただ、監督と話してイメージをすり合わせて、「ここならいけるね」というのを決める担当がちゃんといます。

田村 ドラマではよく病院の全景が映って、当然、

その病院のドラマ上の名前が掲げられた玄関とかが映るわけですが、あれは簡単にパッとつくれてしまうものなのですか？ 例えば通信病院なのに「壮望会第一総合病院」という看板みたいなものはどうでしょうか。

紙谷 看板をつくる美術部がまた別にいて、サイズを測って、簡単につくってしまいます。

田村 現場に行って、パッと貼り付けて終わりですか？

紙谷 そうですね（笑）。

田村 それがすごいですね。通信病院が別の名前の病院として映ったとき、エッと思っちゃった。

紙谷 看板をつくり替えるというのは、もう慣れたものです。

田村 セットの設計みたいなものは制作部というか、そういうところがやるのでしょうか？

紙谷 セットの設計は、美術部のデザイナーがいて、セットの設計や家の飾り、いろいろと全体を見る人がいるんですけど、監督と話しながら、その人がデザインします。

田村 それによって、動きが変わってきたりというのがあるのですか？

紙谷 そうです。壁が一面、全部取れていたじゃないですか（図5, 6）。

ああいうものも美術部と監督が話し合って、速く撮れるようにという条件も踏まえて考えるデザイナーがいます。

田村 なるほど。だから机の前の棚も、よく見ると横板だけで縦板がなかったりするわけですね。

大きな道具は分かりましたが、小道具みたいなものはどこまで、いつぐらいに決めていくのですか？ ぎりぎりになることはあるのですか？

紙谷 それはもう美術部に任せていますね。セットの撮影に入る前、場合によっては一日前とか直前に、美術部が飾ってくれて出来上がったセットを監督と一緒に見て回って、「これは要らないね」「これは要るね」という話はしますが、基本的に細かいところは任せています。もちろん医療関係のところは専門分野の先生方とか、『フラジャイル』では標本作製室の設計を手伝っていただいたサクラファインテックジャパン（株）（病理学的検査分野に対する関連商品を扱う会社）と話し合っていて決めたりしていましたが、筆箱1個とかに関しては、もうセンスに任せ

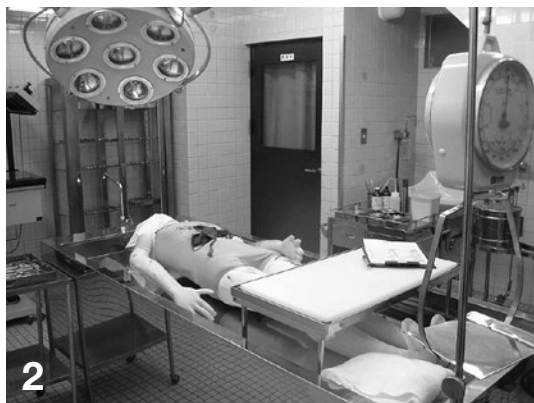


図4 プラネアル赤羽病院スタジオ

1. 閉院した病院がスタジオになっている。
2. かつての手術室を解剖室に改装して、病理解剖のシーンを撮影した。

ています（図7, 8）。

田村 いやあ、美術さんは本当に好きでやっているなというか、凝るなあと思っていたのですが。なるほどですね。

衣装に関しては、また衣装部みたいなところがやるのでしょうか？

紙谷 美術部の中に衣装部がいて、その衣装部が担当します。

田村 ほとんどもう、人数分をそろえとか、ちょっと変わったものにするというのも、そこで大体決めて、それを監督とプロデューサーがオーケーすれば決定ということですか？

紙谷 監督から「こうしたい」と行くほうが多いですね。監督が方向性を決めて、「それならこういうものを集めてきます」というやり方で、絶対衣装合わせをするのですが、そこで衣装部がプレゼンします。

田村 そうですね、俳優さんによって似合ったり、

似合わなかったりするだろうし。

紙谷 はい、そのとおりです。

Ⅲ. 撮影はどのように進むの？

1) 撮影日の1日の様子

田村 今までの話は制作にかかるところまでで、ここからは実際の撮影をどうやっているのか、その様子に話を移したいと思います。僕は撮影現場を初めて見て、いろいろ驚いたことがありました。



図7 主人公の病理医、岸の机

通信病院の筆者の机を参考にし、病理関係に必要な小道具などは通信病院から貸し出した。この机の前の壁も取り外せる。



図5 新人病理医、宮崎の机

この机の前の壁が、棚ごと全て取り外して移動できるようにになっている。



図6 撮影風景

図5の壁を移動して、セットの外から全景を入れて撮影している。



図8 病理学会総会のポスター

ドラマが放映された年の5月に仙台で開催予定だった第105回日本病理学会総会のポスター（東北大学 笹野公伸先生のご厚意により掲載/通称「伊達政宗公のポスター」）。スタジオセットの壁に貼られており（図1右）、多くの病理医からリアルさに感激したという感想をもらった。

朝、スタジオに行って、「おはようございます」で役者さんがそろって、その日に撮影予定の「シーン（5分くらいの）」をやってみて、そこでなんとなく（慶楼大学病理の教授、中熊を演じた）北大路欣也さんが監督と、「中熊の性格だったら、こっちの机の端にちょっとお尻を載せてしゃべったほうがいいんじゃない？」みたいな話をされていて、最終的に動きが決まると、紙谷さんたちスタッフが別室に行き打ち合わせ会議を始めます。そこでカメラワークを決めて、それじゃあ、ゴーしようみたいな感じでしたよね。そのあとは俳優さんたちが同じ演技を何度も繰り返して、それをさまざまなカメラの位置から撮っていく。

僕はあれを見て初めてアッと思ったのですが、たとえば普通のドラマでよくある、お客が外から玄関を開けて家に入っていくシーン。背後から玄関を開ける姿が映ったら、「ごめんください」と言っている顔が映る。続いて「あら、いらっしゃい」と家の人が奥からでてくるのがお客の肩越しに見える、というのを、それまでまったく不思議に感じずに見ていました。でも考えてみると不自然じゃないですか、「じゃ、そこにあるはずのカメラ、なんで映らないの？」ですよ。同じ演技を何度も繰り返していて、顕微鏡を覗く長瀬さんの顔のアップを撮ったり、セットの壁を外して外から全景を撮ったりして、それを編集でつなぎ合わせているというのは、現場の撮影風景を見て初めて知りました。テレビで見ていると、そんなことは想像もしませんよ。

小林 すごく面倒くさいことをやっていますよ、いつも思うけど。

紙谷 まあ、そうなんですよ。

小林 「いる、これ？」って思うもん（笑）。

紙谷 3分くらいのシーンに1時間以上かけますものね、撮影って。

小林 1時間ドラマだとCMを抜いた長さは44分くらいなんです。44分くらいを6、7日かけて撮るわけで、だいたい1日で撮れる尺って、せいぜい5～6分の長さなんです。5～6分を12時間かけて撮っているの、そう考えると、ばかみたいですね（笑）。

紙谷 いや、ほんとばかみたいに思います。

田村 あるシーンで長ゼリフを言ったりするときに、それは1台のカメラですずっと撮り続けることもあるわけですよ。

紙谷 あります。

小林 それは、ねらいであります。

田村 われわれ一般人が撮影現場の様子を見るのは、番組改編期などに特番で放映されるNG集とかなので、なんとなくカメラ1台が追いかけて、途中、ちょっとでもトチったら、もう1回最初から、「テイク24！」なんて言われている場面しか知らなかった。でも、シーンの撮り方はいろいろで、長ゼリフでも一気にいく場合と、細かく繰り返して、それをつないでいく場合があるわけですね。

紙谷 そうですね。

小林 田村先生に『フラジャイル』の最後に現場に来ていただいた解剖のシーンは、もはや何を撮っているか分からないじゃないですか。「これ、やります」と言っているけど、編集が上がれば「あ、これ、撮ってたんだ」って分かりますが、正直、たぶん現場の人も、監督以外何を撮っているのかあまり分かっていなかったと思います。「ここは切るシーンを撮るから、これを用意してくれ」と言われて撮るけれども、どうつながっていくかは、監督しか、意外と分かっていないと思います。

田村 その辺は、最終的には集めてきたものを監督が見て、つなぎ合わせて自分のイメージでということですか？

小林 そうですね。

田村 そのときに紙谷さんはある程度のイメージを持って監督と話して、「これは撮っておかなきゃ」というのを事前の話し合いのときにやっているのですか？

紙谷 そうですね。わたしは監督見習いみたいなものなので、監督がやりたいこと、監督が撮りたいものというのは理解して、現場チーフとして、撮っていくフォローというか、指示をするみたいな感じです。

田村 確かに僕も現場に立ち会って、病理解剖の動きの指導などをしていたのですが、どう使われるか分かりませんでした。演技が決まればスタジオの外に出て、同じことをいろいろな角度から繰り返し撮影しているのを、部屋の外ですずっと待っている状態でしたし。でもあとで放映されたシーンを観て、解剖を進める長瀬さんと武井さんの、マスク越しの目の演技に、自分の病理医としての様々な体験が重なって、思わずウルウルしちゃいました^{注5*}。

2) 現場で使う「台本」は？

田村 撮影現場の仕事の割り振り、やることというのは、別に監督が指令を出さなくても、だいたい決まっているのですか？

紙谷 もう決まっている感じですね。

田村 脚本に関しては、最初に僕の所にメールで送られてくるのは、医者セリフとかが×××になっているところがいっぱいあるものでした。その×××の部分を経験的に見合うセリフを考えて埋めたり、医学的に明らかに間違っている部分を修正して返信する、という作業を何度か繰り返しながら仕上げていったのですが、それがある程度出来上がったときに、準備稿というのをつくるわけですか？

小林 必ずつくるわけではないです。

田村 最終的に出来上がるのが『フラジャイル ○話』という表紙のついた「脚本」ですよね。その「決定稿」になってから、役者さんとか全員に配るわけですか？

小林 通常は準備稿を作って、それから配っています。

田村 そうすると、準備稿を見て、役者さんはある程度読んで覚えていく？

小林 はい。これで完全に覚えるというのが決定稿です。

田村 それで、今日ここに持ってきたのですが、実際の撮影のときに使っていたこの冊子は、なんて呼ぶんですか、台本ではなくて。

紙谷 割本といいます。しかも先生が持ってこられたのは、手刷りのものじゃないですか。お正月限定。三交社という割本屋さんが休むときだけの限定の手づくり割本。すごい、懐かしい。

田村 この内容がすごいなと思って。

脚本の中で、撮影するシーンの部分だけが抜き出してある台本です。脚本もそうですが、各ページの上1/3が空欄になっていて、そのスペースにもセリフの間にもメモ書きのような文字やいろいろな記号みたいなものを書き込んであるのは……。

紙谷 監督です。

田村 脚本を見て、こういう動きとかっていうのをこの中に書き込むんですか？

紙谷 これを書いているのは全部監督です。そこに

書いてあるのはすべて監督の意見というか、アイデアというか。台本をつくってくれるのは宙さんみたいなプロデューサーで、そこから台本を具体化するのが監督です。

田村 撮るシーンを決めて、そこでどういう動きにするというのを決めているのですか？

紙谷 はい、そうです。

田村 割本を見てから現場に集まって、書いてあるとおりに動いてみて、それを見てちょっと違うところを変えて、最終的にどうするかを決めるんですね。そうすると、割本を見たときに、カメラの位置なども、ある程度決まっているのですか。

紙谷 そうですね。その線とか矢印が入っているメモを見たら分かります。

小林 位置関係などがだいたい書いてあるので、見る人が見たら分かります。役者も分かる人は分かると思います。たとえば、ここで僕は立ち上がるんだとか。

田村 そうすると、これが本当に本番用の台本というか、一番大事になる。

紙谷 そうですね、その日の現場では一番大事なものです。

あ、これ1月4日からやっていたんだ。

小林 なんでやっていたんだろう？

田村 これは2016年1月4日、僕がスタジオの撮影に立ち会ったときのものなんですよ。

紙谷 先生、来てくれたんですって？

田村 4日で、まだ病理は暇だった。

小林 4日は、仕事始めだからな。

紙谷 4日から呼んじゃった。

田村 確か朝から晩までいました。

小林 ほんと？ ああ、8～23時か、まあ、普通だなあ^{注8)}。

紙谷 (割本を見ながら) ロケで保育所とか、行ったなあ^{注9)}。

田村 割本の中に、ロケ現場の地図まで付いていて、びっくりしたんですけども。

紙谷 そうです、全部この中にまとめられていて、これを見れば、とりあえずロケ地にも行けるというものになっています。

3) 脚本に書かれていることが、現場で変わっちゃう？

田村 先ほどの「誰が偉い」という話ではないです

が、撮影までに脚本はできている、セリフも入っている。ところが、シーンとかセリフがバツと脚本から変わっていることがときどきあったんですよ。僕は脚本で関わっていたので、放映を観て「え、こんなの、聞いてない!」とか思いましたが、ああいうのは監督が、現場で全体の流れとして変えちゃうわけですか？

小林 そうです。

田村 それに関して、プロデューサーはあまり口を出さないのですか？

小林 いや、口を出すプロデューサーもいます。僕は面倒くさいので口を出さないですが(笑)。

誰が偉いかと言われると、ドラマで言う原作者が一番偉いのです。『フラジャイル』では漫画原作者の草水敏さんが一番偉いわけです。

それと僕の考え方は、0から1を生む人が一番偉いので、だから脚本家も偉いと思っています。それに監修の田村先生がいて、田村先生も偉いと思っています。立てなければいけない。

田村 口うるさかったから(笑)。

小林 原作者、脚本家、監修者のダメ出しに対して、割り切って受け入れてやる監督もいるし、物語優先、お芝居優先でやる監督もいます。それはいろいろありますが、僕の考え方は、原作者、脚本家、監修者が「駄目だ」と言ったら、物語優先、お芝居優先、もちろん監督優先ではありません。

田村 例えば、現場で(北大路)欣也さんみたいなベテランだと「こうしたほうがいい」みたいな意見をいう事は多いのですか？

小林 役者も意見を言うことはありますが、ベテランのほうと言う人は少ないですかね。たぶんベテランは、監督が言うようにやるのが仕事だと思っているんですよ。それは役者のスタンスの違いだと思います。

田村 医療ドラマというのは、役者さんのアドリブというのは、まずないのですか？

小林 もちろん医療シーンは無理だと思います。医療シーンは厳密に、画も、どれを撮っていいとか、撮っていけないとかがあるじゃないですか。わけが分からない豚の臓器を大写ししてもよくないわけで、そういうのはアドリブはちょっと……。

でもお芝居は別でアドリブは結構あるし、それは役者さんのやり方や、監督がそういうものを好きか

どうかというのもあるので、アドリブが嫌いな監督は全部台本どおりにやる人もいますし、それは演出の範疇です。

IV. 医療ドラマの「あるある」!?

1) 医療ドラマでよくある不思議なシーン

田村 僕、いつも思っているのですが、なぜ、医療ドラマは屋上で撮るシーンが多いのですか？

紙谷 確かに。

田村 絶対的と言ってよいくらい、どの医療ドラマでも必ず出てくる。

紙谷 シャベっていますね、必ず、屋上というか、中庭みたいなところで。

田村 まだ庭なら分かるのですが、屋上って。

小林 画を変えたいんじゃないでしょうか。絵柄を変えたい。医療物というのはずっと閉鎖空間になるので、ちょっと開放的なところで撮りたいというのと、屋上は意外と撮りやすかったりします。閉鎖できるので周りの人の目もありません。そういうこともあるのではないのでしょうか。

田村 なるほど。

小林 ちなみに『フラジャイル』の屋上は、全部湾岸スタジオの屋上です(笑)。

田村 医療の世界で屋上で話すことはありえないので。行かないし(笑)。医学生のところから、医療ドラマで出てくると「なんで?」って。屋上の手すりとかを握って、空を見ながら愚痴っている、というシーンが結構あって、「ないよなあ」と思っていたので。

紙谷 でも、ドラマには感傷的なシーンが必要ですよ。一人考えにふけるとか。

田村 なるほど、そういうときにいいわけですね、周りがゴチャゴチャしていなくて、空が見えて。

紙谷 そうです。晴れると空がきれいじゃないですか。確かに屋上のシーンは多いです。

田村 もう一つ、『アンサング・シンデレラ 病院薬剤師の処方箋』という薬剤師のドラマ^{注10)}を監修した薬剤師さんに、本誌のこの「わだい」のコーナーへの執筆をお願いしたのですが、テレビドラマの会議って、絶対に人が多いと指摘されていました^{注11)}。

紙谷 それは監督の考えですね。

田村 普通はせいぜい10人くらいなのに「30人とか、あれは好きでやっているのか？」って。

紙谷 好きでやっています（笑）。監督の自己満足だと思います。少ないよりはいっぱいいたほうが、大きな会議をしている感じもありますし。

小林 本当にそうなの？

紙谷 空間を埋めるためじゃないですか。

小林 今、コロナの問題があるじゃないですか。うちの会社も基本的に対面打ち合わせはよくなくて、ああいう大人数の会議も駄目なんですよ。なので全部リモートで、ZoomやTeamsで会議をするのが鉄則になっていますが、監督はあの会議をやりたがるのです。でも僕から見ると、監督がしゃべっているだけだから、リモートでやっても変わらないじゃないかと思うのですが、みんなの顔が見たいとか、質疑応答があるだろうって。いつも見ているとそんなにないからと思う（笑）。

紙谷 でも本当に監督は大きい部屋に人を入れたがる傾向にあります。

小林 不安なのかなと思います。やっている感が、不安になるのだと思います。

紙谷 この会議室、結構広い部屋ですが、今いるのは5人じゃないですか。ドラマを撮ったら、たぶん全席埋めます。その中に要らない人が5人ぐらいいる。

小林 変なおじさんがね。

紙谷 エキストラさんらしき、変なおじさんが5人ぐらいいて（笑）。

田村 フジテレビの、わりと天井の高い、広い部屋でも撮影しましたね。

紙谷 広報会議室！

田村 そこで、長瀬さん演ずる病理医の岸が臨床医に顕微鏡画像を見せながらプレゼンするのと、武井さん演ずる新米病理医の宮崎が臨床医に診断結果をパワーポイントでプレゼンするシーンに立ち会いました^{注9)}。あれ、びっくりしたのは、臨床科が違ったので、シーンを続けて撮っているのに、座っている20人以上の人たちが全員入れ代わっている。リアルだなあと思って、同じ人でも分からないよなと思っていたのですが。

小林 分からないと思います。あれは自己満足です（笑）。

紙谷 自己満足、そうですね。でも、何かこだわり

たいというか、大きくしたい。

田村 例えば病理医が何かを提示するときに、普通は正面のスクリーンに対して、部屋の隅か、周りと同じ向きの机に座って説明します。部屋の前の中央にある机に一人で座って、あんな大勢の臨床医に向かって、横の大きなモニターを指しながら「こうです」みたいなことは、大学病院はともかく一般病院ではないし。

小林 これはドラマですからね（笑）。

田村 皆の視線が病理医に集まって、逆にかっこいいなと思ったんですね。病理医の中で目立ちたがり

紙谷 私は田村先生といっぱい話して、「本当はこういうことをしないよ」「本当はこうですよ」と監督にも言うのですが、別に本当は要らない。やっぱりドラマ仕様にしたい。

小林 そうなんですよ。

紙谷 監督陣はそう言いますよね。実際はこうです、でも、俺はこうしたい。もっとかっこよく見せたいとかって。

田村 一般の人にとっては、ドラマを観て、普通こうなんだと思っているけれど、医療関係者はエッと思うような（笑）。

紙谷 全部ドラマ仕様です。

2) 医療ドラマならではの苦労話を聞かせて。

田村 『フラジャイル』のときに一番苦労したこととか、『フラジャイル』じゃなくても、医療ドラマで何か苦労した思い出とかがあればお聞かせください。

僕は医療関係のレントゲン写真とか、みんな提供の会社があって、パッパッとそろえるものだと思っていたら、それがないというのもちょっとびっくりしたのですが。

紙谷 田村先生に「ください」って言いに行っていましたものね。「この画像をください」って、私がお願いして、もらって。

田村 レントゲン写真なりなんなりって、確かに病院では患者さんのものを提供できないんですね。そうすると、ドラマ用にどこかにストックしているものがあるのかと思っていたら、意外にないんですね。

紙谷 ないですね。毎回毎回、必要なものを監修の先生にお願いしてもらっています。

小林 あれ、どうしているの？ みんなもらったやつを。捨てているの？ どこかにあるんじゃないの？

紙谷 たぶん、それぞれのパソコンに入っている(笑)。助監督のパソコンに入っていたり。

小林 それを流用すればいいのに。CG か何かを使って。

紙谷 そうなんです、データベースをつくったほうがいい。言っていましたものね、つくったほうがいいって。

小林 会社でつくったほうがいいよ。

紙谷 つくったほうがいいと思うんですよ、今までためてきたレントゲン写真とかあるんだから。

田村 そう。それで教科書が書けるもの(笑)。

小林 今までためたもの、すごくいっぱいあると思う。

紙谷 みんな、メチャメチャあると思います。ただ、田村先生にもらったものを違う番組で使っているのかとか、何かいろいろそういう問題も絡むので。

小林 権利系があるね。

紙谷 そうなんです。それがちょっと心配で、毎回出さないというのはあります。

田村 僕が忘れられないのは、ドラマの中で使う正常画像とか、内視鏡のビデオ画像などを手に入れるために、お二人に人間ドックを受診していただきましたよね。その画像を、「患者本人が納得し、希望している」という主旨の承諾書を書いてもらって提供しました。でも、胃カメラを飲んでもらったり、大腸ファイバーを受けてもらったりで、やっぱり大変だなあと思って(笑)。

小林 僕、初めて全身の人間ドックを受けましたもの。

田村 それで胃カメラの再検か何かになって(笑)。

小林 要再検という結果になって、田村先生が「がんになったら診てあげます」って(笑)。ひどいと思って、大丈夫でしたけど。そんな感じなんですよ。

3) ドラマの中の医療部分、スタッフはどのくらい理解してる？

小林 あと、医療物で大変なのは、要するに僕は素人なので、話の内容がまったく分からないじゃないですか。それを田村先生に叱られながら、本を読み、うーんと思いながら、だんだん話していると分

かってくるのですが、専門用語も分からないですし。でもなんだろう、なんとなく論理的じゃないですか。論理的だから分かってくるのですが、それを理解するまでは、ちょっと面倒くさいというか、大変ですね。

手術は「ここ、切ればいいじゃん」みたいな話になるとは思いますけど、病理とかはちょっと違うので、そこら辺の数値がどうのこうのとなっても…、いまだにPET検査の意味が分かっていないですから(笑)。

紙谷 私も分からない。

小林 「PET検査する」というセリフがありましたが、「なんだっけ？ PET検査」みたいな(笑)。でも、なんとなく「何かの検査ですね」ぐらいな感じで。

田村 『フラジャイル』で扱った疾患では、本当にその病気の人がいるわけです。ドラマのストーリーとして扱われると、それを観た友達とかに「おまえの病気って、ああなんだ」と、ドラマの話とまったく同じだと思われて、とてもいやだった、という話を聞いたことがありました。それで医療監修を引き受けるにあたって、なんとかしてそういうのだけは避けたいと思ったんです。ところがドラマで説明セリフを入れてしまうと全然面白くないし、かといって病名がバンと出てきても誰も分からないみたいなことがあって。どうにかしたいと小林さんに相談したら、「じゃあ、ホームページで説明を」というので書かせてもらいました。最初のうち結構ダメ出しをもらって、僕は分かりやすく書いたつもりだったのですが、「中学生ぐらいが読んで分からないと、ドラマ自体が難しいと思われて視聴者が離れてしまうから」と言われて、放映と同時に載せられるようにギリギリまで修正して書いていったのです。ところが、5話を過ぎたあたりから、原稿を送ると、小林さんが「すごく分かりやすい、これでいきます」、「僕、そんなレベルを変えていないよ」と。

小林 田村先生も、成長したなと思った(笑)。

紙谷 たぶん近づいたんですよ、田村先生が下りて、宙さんが上がって。

小林 俺、たぶん上がったと思う。

紙谷 そうそう。宙さんは上がって、田村先生はたぶん現場に来て、バカなスタッフに説明してみても自然に落としていった。

田村 最後の頃は原稿を読んで、みんなずっと理解

してくれて、まあこれが普通でしょうとか思ったけれど、最初の頃のことを考えると、このまま本当にホームページに出して大丈夫かなって。

しかし、ああいうものを興味を持って読むのは医療関係者の人が多くて、投書などもそういう人たちからのものがほとんどだったから、あとからみると問題なかったですけど。当初はホームページに載せてもらうというだけで結構大変でした。小林さんに頼んで、フジテレビの広報局に交渉してもらって。

今はそういうものを載せるのも普通になっているみたいですね。『アンサング・シンデレラ 病院薬剤師の処方箋』でも、薬剤師さんがホームページに解説を書いたと言っていました。

紙谷 ゆるくなっているのでしょうか。発表しやすくなっているというか。

小林 全然、やってもらっていいんじゃないですか。

紙谷 そういうのは、やったほうがいいですよ。

田村 この間、『トップナイフ―天才脳外科医の条件―』^{注12)}を観たのですが、毎回病気の説明シーンがありました。新人の脳外科の専攻医がいて、難しい病気が出てくると、「ほら、これはなんだ、おまえ、言ってみろ」と言わされて、そこでダーッと説明するという、うまい方法だなと思いましたね。医療関係で普通の人聞きなれない名前が出てきて、それを説明できないというか、どこまで分かってもらうのかみたいなのが、僕は監修をやっていてジレンマを感じましたが、でも、説明方法に定番はないから。紙谷 どこまで分かる必要があるか、分かったほうがいいのかというのは難しいですね。

小林 ドラマを観ている人というのは、そこをあまり望んでいないんじゃないですか。田村先生に原作にはない病気を考えてもらったときも、「なるべく重篤で、でも死なない程度で、見た目もヤバイほうがいいんです」みたいなことでお願いしました。やはり見た目じゃないですか。苦しんでいるほうがいいですね、ひどい話ですけど、それが救われるほうがスカッとするので、そういう病気を探してもらったりしましたよね。

その辺が重要であって、病名をバーッとと言っても、これがどういう症状でというのはあまり関係なく、どちらかというと命の危険があるほうが重要なので、そこを立たせていくほうがドラマだと思っています。だから説明は後づけで、ホームページとかで

のほうがいいと思いますね。

4) 驚いた役者の実力

田村 ちょっと話がずれますが、僕は現場で2回びっくりしたことがありました。一つは技師が病理の標本をつくる作業で、薄切といってパラフィンブロックの標本をミクロトームという器具を使って3～5ミクロン（ミクロン＝1/1000mm）という薄さに切って、切れた切片を細い短冊状の紙で採って、水に浮かべるという作業をするシーンのことです。サクラファイナテックジャパン（株）の人が来ていて、その人がやることになっていて^{注9)}。リハーサルで、顔のアップからずっと撮っていたときに、検査技師役の野村君がすうっと作業をやってしまった。「これ、いけるじゃん、このままで」ということでそのまま撮ってもらったんですけど、役者って、そういうことができちゃうのでしょうか？彼の才能なのか、普通に役をやっている人って、ある程度器用で、その役にはまるとできてしまうのかどうか。

紙谷 人それぞれですね。

小林 でも、若い子は、結構器用な子が多いんじゃないかなあ。

田村 特に練習したわけでもないですよ。見て覚えている。

紙谷 練習はないですね。野村さんが見よう見まねでやったんだと思います。野村さんはかなり器用なほうですね。武井さんもそうですし。

田村 もう一つ驚いたのは、その武井さんです。病理解剖のシーンで、外科医とか病理医がはさみを使うときは、持ち手の穴に親指と薬指を入れ、中指は薬指側の穴の上に添え、人差し指を刃の根元に当てて切るんです、はさみがグラグラしてずれないように。普通は、はさみを親指と、人差し指か中指を入れて持ってしまうし、長瀬さんはその持ち方でしたけど、武井さんは初めから外科医のはさみの使い方やっていた。教えていないのになんでだと思ったら、前に『ゼロの真実～監察医・松本真央～』^{注13)}で監察医の役をやっていたことを思い出して。でも、そこでやったことをそのまま覚えてしまうんだというのが驚きでした。彼女が演じた監察医が、何か考えるときに必ず逆立ちしていたのを思い出して、撮影の合間に暇そうにしていたのでいきなり「逆立

ちする？」と聞いたら、「え？観てて下さったんですか」と即座に返事が返ってきたので、やっぱりそのときの経験を覚えてるんだと確信しました。

小林 役者さんはいろいろな役をやっているの、覚えてますね、皆さん。初めてのときは教えなければいけません、一度覚えれば、みんなずっと覚えてますね。

田村 なるほどね。メスでお腹の皮を切って、腹膜をはさみで開けていくときに、コッヘルで腹膜の両側を挟んで、向こう側とこっち側を引っ張って、中の臓器を傷つけないように開くようにして切っていくのですが、解剖の助手役をしていた武井さん^{注14}は2つのコッヘルをずっと両側に引っ張って、術者が切りやすいようにしたんです。シーンには映らなかったのですが、すごいセンスだなあと思って。研修医や病理の人に病理解剖の助手をさせても、できないんですね、「はい、ここ持って」「はい、こっち持って引っ張って」みたいなことを言わないと。やっぱり、役者さんって、そういうものを見て覚えるときに見方が違うのでしょうか。

小林 それはあると思います、それが仕事なので。たぶん普通の人よりも覚えるのがずっと速いと思います。武井さんは忙しい時期も多かったと思いますが、忙しい仕事をしている人は、だいたいすごく覚えるのが速いです。

田村 僕は後進の者を指導するときに「言葉で教えなくても、見て覚えろよ」と思うんですよ。頭でできることと実際にやることは違って、いくら本を読んでも、やらせるとできない。それはやっているのを見て、自分がやるつもりになって見ていないとできない。

臨床実習のときに外科の先輩から「術中に術者や助手が何かで倒れたら、その下の者が代わって手術を進めるしかない。手術の見学をするときは、常にその意識を持って、何かあったときに交代するつもりで見ている」と言われた。それが臨床実習でも医師になってからも役立ちました。今の学生や研修医にはその意識がなく、「見学者」になりきってしまっているのが残念です。

小林 役者さんがちょっと違うのは、彼らは意味は分かっていないですから。「ここに行って、これを取るんでしょ」「これを切るんでしょ」みたいな、なんで切っているのか、なんで取っているのかは、

たぶん分かっていないです。

だから本当に動きを覚えているだけです。「これ、開けばいいんでしょ」、なぜこのタイミングで開くのかとかは、まったく覚えていません。

田村 なるほどね。

紙谷 そこは気にしない。

小林 気にしないという点では、もう機械と一緒にです。

紙谷 そう。ああいうところは、ほんと機械と一緒にです。ダンスの振り付けをその通りに踊る、という感じでしょか。

田村 とりあえず、見た目で画を取ればいい。

紙谷 そうです。見て吸収するものがメッチャ多いです、なんかね、すごい。

V. リアリティの追求と、フィクションの許される範囲

1) リアリティはどこまで追求するの？

田村 医療ドラマを作っていて、リアリティはどこまで求めるのでしょうか？

小林 やっぱりちょっとしたリアリティというか、『フラジャイル』ではそんなになかったのですが、手術シーンは本当に大変ですね。だから外科医の話とか、ちょっと短く撮るのでも、撮影が10時間ぐらいかかってしまったりしますから、大変だな、よくみんなあんなに耐えられると思います。

田村 それは役者さんが自分で練習して？

小林 そうですね。あとは画で、顔を撮っていれば手が映らないし、そういうふうに飛ばしていくのも演出家のほうも本当に大変ではないかと思います。

田村 その医療ドラマのリアリティに関してなんです、おそらく医者や看護師の誰に聞いても一番突っ込みたくなるのが、心停止後の蘇生のシーンですね。まず心臓が止まって、モニタの心電図がスーッと平らになるのが映るわけです。

紙谷 心臓が止まったらですね。

田村 心臓が止まった。そうすると、医者や看護師がバタバタと病室に集まって、心臓マッサージをするけど心電図が心停止のままだと「電気ショックの用意！」とか言って。そこでドーンとカウンターショックを与えて、1回で駄目、3回目ぐらいで平

らだった心電図から、いきなり正常の波形が出始める。そんなのあり得ないですよ。

いわゆる電気ショックというのは、心筋細胞一つ一つがバラバラのタイミングで収縮を繰り返し、心臓全体がポンプとして血液を送り出せなくなった、心室細動という状態のときに行います。外から強い電氣的刺激を与えて心筋細胞を一斉に収縮させ、それによって収縮の足並みを揃えさせるためのものなんです。だからピクリとも動いていない心筋細胞にいくら電気ショックを与えても、心臓が動き始めることは決してありません。

僕が知る限りアメリカの医療ドラマは、昔からそういうでたらめなシーンはありませんでした。心臓マッサージでちゃんとモニターに心室細動の波形が出てきて、カウンターショック後に心拍が再開する、その波形も当初は正常とは違った形をしていて、次第に正常化していく、というリアルなものでした。最近はAEDができて、講習会などで「心電図つけてください」「心臓マッサージを続けてください」「心室細動の波形が確認されたら」「ハイ、電気ショックを与えてください」というような音声指示がでるのを観る機会もありますので、一般の方の中にも心肺蘇生の知識を持つ人が増えました。だから、ドラマの中のありえない蘇生の映像は日本でも少なくなっていくかもしれません。でも僕は昔から、ああいう「ウソ」を医療監修者がなぜ修正させないのか、腹立たしく思っていました。

紙谷 ドラマの撮影には必ず監修はいる、絶対いますものね。

小林 面倒くさいと思うんじゃないですか。

紙谷 そうですね、言ったところで聞き入れられるかどうか、というね。

2) ドラマの中で、フィクションはどこまで許される？

田村 今回のインタビューで、僕がどうしても小林さんにお聞きしたかったのは、フィクションの作り方というか、制作側はどこまでフィクションが許されると考えているのか、という点で、現場でもいろいろ考え方をお聞きした覚えがあります。

例えば『フラジャイル』だったら、本来、乳がんは外科、子宮がんは婦人科が担当するのですが、小雪さんが演ずる細木は両方やらなければいけないから女性外科をつくる。これには僕もあまり抵抗を感

じなかったのです。しかし、病理診断科と放射線診断科が同じ「診断科」としてまとめられているのは、ちょっとどうかと思いました。放射線科は治療もやるし、まったく別分野なはずですが。ただ、フィクションとしてはありかなと受け入れることにしました。

そんな僕の迷いに対して、小林さんから刑事物を例にして、普通はない部署をつくってもオーケーだけれども、その部署をつくったために法律を変えてしまうような設定にすると、絶対に視聴者はついてこないといった話を伺ったように思います。

小林 そうですね、そのような話をしました。

フィクションって、大きなうそは一つ一つでもいいのかなと思っていますが、その大きなうそ一つで細かいうそがいっぱい出てしまうと、ドラマとして、もうちょっと成立してこなくなるかなと思います。

「女性外科」というのはないけれども、「女性外科」というものがあるものだと思えば、別に医者も変わらないし、動きは変わらないじゃないですか。それによって多くが変わっていってしまうと駄目だけれども、別にその辺の一つだと、たぶん視聴者はついてくると思うんですね。あれもうそ、これもうそとなってしまうと、もはやファンタジーになってしまうので、そこが分かれ目でしょう。視聴者もフィクションだと思って観ているとは思っているので、そこら辺は受け入れられると思いますが、どこまでリアリティを求めるかはあると思いますので、その区切りは注意しなければいけないと思っています。

田村 警察物は強烈にフィクションがあって、刑事さんとかが見たら、腹を立てる人はいるだろうなと思います。

小林 医療と違って刑事物は、警視庁が、警察庁もそうなのですが、広報が一切取材に応じないのです。取材に応じない代わりに好きにつくってくださいという暗黙の了解があって、だから、彼らにとっては、もうフィクションなのです。

田村 観ているほうも、あそこまでいくと、完全にフィクションだと思っています。例えば、刑事がバンバン発砲するとか…あり得ないですもんね。

ところが医療物は、現場で手術が出てくる、患者さんが出てくると、どこまでフィクションかというのが観ているほうは分からなくて。リアルなところが出てくるほど、全部がリアルじゃないかみたいに見えるかなというのも、関わっていて心配でした。

リアルにつくりたくはあったんですけど、そこでみんながリアルな部分を正確に分かってくれるわけではなく、どこかで勝手に解釈したときに実は跳ね返るのが、医療現場だと困るわけですから。

「昨日テレビのドラマで、皮膚にこういうのが出てきて、何とかいう病気だってわかったんだけど、その後あっという間に死んじゃったのよ！」と言う患者さんがきて、「それはそうじゃなくて、あなたの場合は…」みたいなことが往々にして起きるので。そうするとドラマのフィクションというのが、医療ドラマの場合、制作側ではどのように線引きしているのが気になるところです。

小林 何を許して何を許さないかというのはプロデューサーの感覚でしかないですね。病名をすべて架空のものにしてしまうこともあると聞いています。かかっている方、あるいはご遺族の方の気持ちを考えて、症状が似ていて、誰かを傷つける恐れのあるものは、フィクションの名前にしてしまう。そこもフィクションのドラマこそじゃないですか。

田村 そうですね、病気の名前を変えてしまえば、何を言っても、どう言われても絶対に問題ないというか。

小林 そうです。だって、架空の病気だから。

田村 しかし『フラジャイル』は原作もそうでしたが、そのリアルさを求めて本物の病気を題材にし、その病気の病理標本を画面に出していました。病理のドラマだから、絶対にその病気の本物の標本を出したい、というこだわりが僕にあったわけです。もちろん通信病院だけでは特殊な疾患の標本はそんなにないですし、全国の病理医が協力してくれました(図9)。

3) 医療監修の依頼と、楽しかった現場での監修

田村 ところで、医療監修者って、どういうパターンで選んでいるのですか。昔、2時間ドラマで医療物を数多く放映していた頃に、テレビ業界に詳しい友人に聞いたら、リタイアした皮膚科が何かのおじいちゃん医が「監修」を仕事にされていて、自分の専門でもないものでも、とりあえず監修で出ていっているの、結構いい加減につくられているんだと言っていました。本当かどうか分かりませんが、それではどうやって依頼しているのでしょうか。「このドラマ



図9 顕微鏡動画の撮影

撮影が終わった夜中にスタジオに通い、ドラマの中で画面に出す「本物の標本」の顕微鏡画像を動画に撮った。希少例は全国の病理医に呼びかけ、症例報告をしたものなどの標本を送ってもらった。

だったらどこに」という特定の引き受け手があるのですか？

小林 特にないですかね。

田村 どこかに頼んだときのつながりなどですか？

小林 それはありますし、そういうものを紹介してくれる会社もあるのですが、田村先生の場合は、僕、田村先生が書いた本^{注15)}を読んだんです。本を読んで「この人が一番分かりやすいな」と思って(笑)。

田村 ああ、それで出版社から病院に、テレビドラマの医療監修の依頼があったが連絡先を教えても良いかと電話があったんですね。

小林 病理の本を何冊か読んだんですよ。

田村 僕は『フラジャイル』のという漫画は全然知らなかったし、感音性難聴で耳も聴こえないし、医療監修なんてできないと思ったんです。でも、話を聞かないで断るのも失礼かと思い、「とりあえず、その漫画を送って」と言ってみたら、リアルなんだけれども細かく違うところがいっぱいあったんです。まず病理医と臨床検査医を混同していたし。この話を病理医ではない先生が監修してしまうと、えらいことになるなと思って。

ほかにも候補というか、やってくれそうな先生を考えたのですが、結構、東京ではない場所にいたりするので、じゃあ、自分がやるしかないかと(笑)。

紙谷 田村先生で、東京でよかったです。他の候補の先生なら、私が地方に通うことになっていましたよ。どれだけ通信病院に行ったか。田村先生のところに、週2日ぐらいで行ってましたよ(笑)。

田村 あと、小林君がよく来ました。

紙谷 そう、祐介。

田村 汗かいて。

小林 いい思い出になったんじゃないかな。

田村 小林君は若くて、演出補の一番下だったから、本当に仔ネズミのごとく走り回っていましたね。

紙谷 『フラジャイル』では演出部、助監督は3人ぐらいしかいなかったですからね。

田村 確か、始めは2人だったから。

紙谷 私と小林祐介と。本当はもっと多いんです。

小林 今は6人ぐらいいます。働き方改革で。

田村 現場で、手術室から提出された乳腺の迅速診断の検体を、病理医の岸が凍結切片用に小さく切るというシーンがあって^{注16)}。ところが、用意されていたのは鳥の脂で、この色じゃないし。そのときはカレー粉をつけて。それが結構リアルになりました。

紙谷 美術部の山科さんがカレー粉つけてくれたんです。

小林 カレー粉、持ってきたの？

紙谷 鳥の脂にカレー粉着けて。

小林 つけたんだ。面白いじゃない。いい話じゃない。

田村 先ほどから話に出ていますが最終回で、治験薬の副作用で、患者が膵炎で亡くなってしまう話があって、現場の貸スタジオで美術さんと、その膵臓をつくろうということになった(笑)。

紙谷 現場でいきなりそう話して、やっていましたね。

田村 豚の膵臓は人間のとは形が違うのですが、豚の脾臓が人間の膵臓ぐらいで形も似ている。普通、膵臓は白っぽい黄色なのですが、出血性壊死性膵炎の設定なので色も丁度いい。これをもとにつくろうと言っただけけれども、本当の病変部は均一の色じゃなくて、白くなったところとか硬くなったところとかいろいろあるから、片栗粉とか、小麦粉とかが欲しい。そうすると、寒い夜の9時過ぎなのに、小林君がコンビニに走って調達してきた(笑)。

紙谷 本当にお料理するみたいに。

田村 2時間ぐらいでつくって、横で監督が「先生、それ映さないからね、そんな画面に出さないから」(笑)。「いい、いい」って(図10)。

紙谷 本当に映せなかった。

田村 役者さんに見せるだけでいいと。

紙谷 ばやけた感じで。



図10 美術さんの仕事

ブタの脾臓で、急性出血性壊死性膵炎の臓器を作っていると。美術さんと二人で、凝りに凝ってつくった。

小林 ちょっと映ってたんだ。

紙谷 ちょっと映った。

小林 じゃあ、よかったじゃない。

田村 撮影に入る前に人形のお腹の奥に入れて、武井さんに「こういうのがここにあると思って演技して」って。

紙谷 武井さんは「はい…」って言って。

田村 いや、でも本当に小林君はよく動き回っていた。

紙谷 『フラジャイル』の現場は、ものすごく楽しかったですね。

田村 小林さんとバトルをしたのが、子供を小児科に連れて行って、小児科の医者がわけの分からないことを言って、それを母親(本当は叔母)がノートに逐一全部書いてきて、宮崎のやっている診療相談外来に来て、「こう言われた」「こう言われた」と訴えるというシーンがあって、それはあり得ないと言ったんです^{注17)}。医学用語ってものすごく難解で、それを一字一句書くのは素人にはあり得ない言うのだけれども、小林さんは「できる」と言って。

小林 できないですよ。でもそれでは台本が進まないから(笑)。

できないと思うのですが、そのときに僕が説明したのは、「子供を救いたいから必死になっている母親は、そこまでできちゃう」と示したかった。それがフィクションですよ。

田村 必死になれば、ここまでできるとかって言っていましたよね。

小林 フィクションです、フィクション。

紙谷 必死になれば、なんとかできる。

小林 そうです。

紙谷 でも、本当にフィクションですよ。

田村 でも、絶対にあり得ない。医学用語が一般の患者さんにとって非常に分かりにくいと問題にされていることもあったので、そこは譲れない。むしろ、小児科医に言われたことがさっぱり分からなくて、不安で宮崎の所に相談に来るとというのがホントだし、視聴者の共感を呼ぶはずだと、相当バトルした覚えがあります。最後は僕の意見を通してもらいました。

ああいうことは、監督や医療監修者と結構起きるものですか？

小林 監修の先生とは多いです。よく対立します。

田村 どちらも譲れない。

小林 譲れない、は多いです。仲たがいますときもあります（笑）。途中から監修者の名前がなくなったな（笑）、あ、これ、終わったんだとか。監修者がなくなるときはあります。

田村 そうなんだ、やっぱり。そこまで本気になるんですね。

小林 あると思います。やり方にもよりますけど。こうやってちゃんと話すこともありますし、話さないときもあります。

どうしようもないときって、あるじゃないですか。例えば、現実的にありえませんかみたいなこと、「病理医のいる病院で検査技師が一人なんてありえない」と言われたら、もう『フラジャイル』は終わりですから。」

田村 フィクションを入れないとドラマにならないし、僕らの仕事で朝から晩まで顕微鏡をのぞいて診断を書いてというのをずっと撮っても、何もドラマにならないので、それは分かると思っていたのですが、やっていると「ここは譲れない」というのが出てきて。

もう一つ、これは原作がそうだったからどうしようもなかったですが、大腸の内視鏡を4回やるとかもあり得ないですね^{注18)}。

小林 クローン病のときですね。

田村 あれを4回やると言われたらどうでしょう。

紙谷 しかも結構短期間でみたいな話で。あれはきついなとは思いました。

田村 観ている人自体、そういう医療シーンがどうのこうのよりも、ドラマ全体の話の流れで、最後はよかったとか、涙するとかというパターンのほうを

重視するのであれば、やはりこうなのだろうなって、やっていると思ったのですが、細かく撮っているときにああいうのが出てくると、「それはないんじゃないの？」って。

紙谷 話を通して観ると、そこまで細かいところが気にならなかったりしますね。

田村 そうそう。全部通すとね。

紙谷 ドラマのほうをちゃんと観てしまうから。ただ、監修の人にもよく言われます。

田村 そうでしょうね。

紙谷 病院の人にも言われますし、救急や消防の方から言われることもあります。でもその都度、話して納得してもらってというのを日々繰り返しています。

VI. 放映が始まってから放映後まで

1) 視聴者からの反響への対応は？

田村 視聴者の反響というか、今はホームページに書き込みとかがあって、いろいろな反響がありますよね。ああいうものはどの程度気にするのですか？それによって方針が変わってしまうことはあり得るのですか？

小林 あり得ると思います。みんな、とても気にしていると思います。SNSの反響とか、気にしない人はいないんじゃないですかね。みんな「気にしない」とは言っていますが、それなりに気にしていると思います。

田村 それを読んで少し変えとか。僕が覚えているのは、説明セリフを入れないと言っていたのが、最低限の説明をテロップで下に入れようと途中で変わったのがあったのですが、やっぱりああいう声が届くわけですね。

小林 そうですね。

紙谷 意味が分からないという人が多い場合には、もう少し詳しく説明しようかということもありますし、テロップをちゃんと入れようということも変わりますね。

田村 例えばクレームがくることはあるのか、逆に感謝のメッセージがくることはあるのか、そういうものに対してどのように対応するのでしょうか？

小林 クレームはあります。ありますが、最終的にはプロデューサーが対応しますが、そこまでは上

がってこないですね。本当にもめると上がってきますが、だいたい視聴者センターとかで収まって終わりでしょうか。

紙谷 そこまでひどいクレームというのは、なかなかないですかね。

みんな、Twitter とかにはいろいろ書き込みますが、局に直接とか、うちの会社に直接クレームが届くというような、そこまでのものはあまりないですかね。感謝はされますか？

小林 感謝されたことがない。

紙谷 芦田愛菜さんには感謝されたんです（笑）。芦田愛菜さんが病理医になりたいというのは、『フラジャイル』を観てでしょう^{注19)}。

小林 そうだね。

紙谷 それは感謝されているんじゃないですか。

小林 会ってないけど、いつか彼女に言ってやりたい、「俺、やってたんだぞ」って。

田村 芦田愛菜ちゃんのあの発言は、病理医の間でも大騒ぎになって（笑）。

小林 まだ言っていますね、芦田愛菜さん。

紙谷 まだ言っています。医学部に入るって言っていますね。すごい決意。

田村 『フラジャイル』が放映されたとき、病理学会に、実際の病理科を見学したいって連絡してきた中学生がいて。結局、ある大学病院の病理で見学を受け入れたんですが、放映中は結構、病理学会のホームページのアクセス数が一気に増えたと言っていましたね。

小林 病理医って、言い方はよくないですが、血とかもそんなに見ないですし、そういうお医者さんもあると知って、やりたい人は多いんじゃないかなと思うのですが。

田村 いや、医学生で病理医志望者はほとんどいいし、一般の方は病理医などという医者はまったく知らないです。『フラジャイル』を観て初めて知ったという人がほとんどで。例えば胃カメラをやって、そこで組織を採って、結果はこうでしたというのは採った医者が説明します。実際にそれを診断しているのは僕らですけど、表に出て行かないから、採った人が診断していると思っている。だから実は病理医というのがやっているというのを、あのドラマで初めて知った人が多くて。

紙谷 私もそうです。

小林 僕もです。

田村 あれを観て僕のやっている病理外来^{注20)}で、病理医から直接説明を聞きたいという人もでてきました。

小林 いいですね。

田村 それまでは、病理を知っている医療関係の人が、病理医から話を聞きたいという申し込みはあったのですが、まったく知らない一般の人がそういうふうに言ってくるというのは確かに増えました。

2) ドラマ制作現場での「お約束」

田村 昔は、番組の宣伝というのはどうやっていたのですか？

小林 今と変わらないです。放送当日に電波ジャックをして、なんとなく、フジテレビならフジテレビのバラエティに出てというのが一般的で、それは変わらないです。まあ最近はちょっとSNSを使うことも多くなったくらいで、基本は変わっていないですね。

田村 『フラジャイル』は何か事前にやったんですよね、放送前に人を集めて？

小林 制作発表や記者会見は毎回しています。今はコロナでやっていませんが、毎回制作発表はします。それをスポーツ紙とかも記事にするんですね。だからスポーツ紙用に宣伝を兼ねてやります。それがどのくらい宣伝効果があるのか、正直分からないですが、やるのは慣習になっています。

田村 僕が初めて監修でスタジオに行ったのがクランクインだったかどうか分かりませんが、そのときは紙谷さんが1人ずつ部屋に入ってきた人を「〇〇さんです」って紹介して、みんながワーっと拍手をして迎えていましたが、あれがだいたいの始まりですか？（図11）

紙谷 そうです。皆さんをちゃんと紹介して「よろしくお願いします」と言う。そして監督も紹介してというのが始まりです。

田村 クランクアップのときは、何かイベントをすることはあるのですか？

紙谷 花束をお渡しして「宮崎役の武井咲さん、オールアップです」「お疲れさまでした」というのはちゃんとやります。

田村 放映終了後の「打ち上げ」というのは必ずやるものなのですか？



図 11 スタジオでのクランクイン

初めてスタジオ監修に行ったときの様子がビデオに撮られていたのを知らず、ドラマの放映前にメイキングビデオとして放映されたのを知ってびっくりした。写真はちょうど筆者が、紙谷さんに紹介されているところ。

小林 今はコロナでできていないですが、コロナが流行る前はやっていました。

田村 それはどこが企画しているのですか？

小林 プロデューサー部ですね。

予算は基本は協賛金でやっています。皆さんの各事務所や各会社がお金を持ち寄って慰労するという会なので、個人的に払うわけではありません。会費を取っていないので。

田村 各事務所や各会社の人がメンバーで参加をする？

小林 そういうことです。

田村 あとはスタッフでしょうか？

小林 はい。

田村 会で何か余興をやるかというような企画は誰がするんですか？

紙谷 われわれで。

小林 内輪で。

田村 みんなで楽しく？

紙谷 そうです。

小林 そうですね。

田村 盛り上げようみたいな？

紙谷 盛り上がらないことが多々ある（笑）。

紙谷 撮影が終わりに近づくと、下っ端は打ち上げの準備で頭を抱える。

小林 出し物でね。

紙谷 ビデオを撮るのか、踊るのか、いろいろありますものね、毎回。

田村 一つのドラマをつくるグループの中の半分以上が俳優さんで、ある時期、ぱっと集まってドラマをつくって「はい、解散」、全部がなくなる、みた

いなことは、僕らの仕事だとないんですよね。

それが当たり前だと思っていると受け止める感覚が違うのかもしれませんが、どうなのでしょう。例えば、僕なんかは学園祭などでいろいろやったとき、終わるとガクッと落ち込んで、祭りの後みたいな、なんとかロスみたいな感じになりましたが、そういう感覚というのはありますか？

小林 僕はないよ。

紙谷 ええ？？

小林 もう、クランクインしてからずっと「あと何日で終わる」って考えている（笑）。早く終わらないかなって、「放送日まで何日だろう」ってずっと考えているタイプの人間だから。あなたはありそうだけれども。

紙谷 私はいつもロスです。

小林ほんと、熱いなあ。

紙谷 でも、しんどかったのがやっと終わるというのがあります。もう本当にきつかったのが終わるという思いと、明日からもう会わなくなるという思い。宙さんとかとは会社で会いますが、他のスタッフやキャストというのは会わないじゃないですか。毎日会っていたのが会わなくなるのは、メッチャ寂しいです。メッチャ寂しいですけど、もう慣れました。

小林 まあ、でも、まだどこかで会いますからね。

紙谷 そう、また別の現場で。

小林 すれ違ったりしますから。

田村 僕も『フラジャイル』が終わったら、ちょっと呆けたみたいになって、まだそのときは放映は続いているけれども、やっぱり「あの忙しさはなんだったんだ？」みたいな気持ちになりました。

紙谷 でも、思い返すと楽しいなって思います。

田村 うん、楽しい。だから続編をやりたい（笑）。

紙谷 大変ですけどね。メチャクチャ大変ですけど、終わったら楽しかったなって思えるので、次もやります。

田村 それでみんなやっているのでしょうかね。

紙谷 そうです、そうです。

田村 その中で、「〇〇組」みたいに、わりと集まりやすいグループみたいなものはあるのですか。俳優さん同士は結構会うのでしょうか、スタッフと俳優さんがあとで飲みに行くということはないのですか？

紙谷 私はないですけど、プロデューサーとかはどうですか。

小林 僕はありますね。

田村 仕事の内容や関わりによるのでしょうか、そんなに厳密にどうのこうのというのはないのですね。

紙谷 関わり方ですよ、きっと。現場の人たちとはご飯とか行きますし。でも、俳優、キャストとは行かないです。

田村 スタジオの差し入れというのは、恒例なんですか？

小林 まあ、恒例ですね。みんな、何か持ってきてくれる。

紙谷 そう。たぶんスタッフの士気をあげて、少しでも早く帰れるように、「頑張れよ、おまえら」という気持ちで。

田村 あれは俳優のマネージャーさんが用意するのですか？

小林 そうですね。

田村 最近、テレビで取り上げるようになって分かったのですが、誰の差し入れがおいしいとか、誰があれを持ってくるみたいなのが、ある程度あるわけですよ？

紙谷 センスが問われます。

小林 センスが問われます、「クッキー、要らねえ。ボソボソなるから」って。

紙谷 センスなんです、「こんなの、撮影の合間に食べられないから」とかはあります。

小林 「プリンとか無理だから」って（笑）。

田村 フジテレビだと、やっている最中にホームページなどから買える、番組オリジナルグッズをつくるじゃないですか。あれはどこが、どういう担当で、どういうアイデアでつくるのですか？

小林 フジテレビにそういうグッズをつくる部署があって、そこが案を僕とかに持ってきて「こういうのをつくろうと思ってます」みたいな話をします。「え、もっとほかはないの？」とか、「これでいいよ」とか、そういう感じでつくっていく感じです。

田村 プロデューサーに相談に来て、プロデューサーがドラマのことをよく知っているから、その中の小物で、こういうのをというアイデアを与えている感じですか？

小林 そうですね。それとか、「これ、セットに置くか」みたいなところから、置いておくと売れたりするので、そういうグッズもあつたりします。

田村 なるほど。

3) スタッフの育成

田村 制作に関わるスタッフの育成についても、お聞きしたいのですが。実際に見ていると、スタッフはやり方を見て覚えるというか、現場で覚えていくような仕事だと感じましたが、養成学校みたいなのはあるのですか？

小林 あります。専門学校があります。

田村 そういふところの出身じゃなくても、別に普通に入れるんですか？

小林 普通に入れます。

田村 例えば何かのステップで資格試験があるとか、そういう内容のものは特にないのでしょうか。

小林 ないです。

田村 そうすると、自分のやりたいものをやりたい部門で、下でくつついて、経験を積んでいくと「じゃあ、おまえ、やってみろ」みたいな感じですか？

小林 そうです。

田村 それが普通なんですか？

小林 はい。

紙谷 試験があつたら面白いですね、助監督。

小林 助監督は誰でもできるだろう。

紙谷 サード助監督、セカンド助監督の試験。

小林 美術だけは美術学校を出ているのが多いです。でも、出ていない人もいるんじゃないかな。

紙谷 出ていない人もいます。

小林 確かに、美術でも、本当にふらっときた人もいます。

紙谷 技術部も技術学校を出ている人が多いか。

小林 でも、技術も別に問わないから。

紙谷 私たちが一番専門職じゃないので。

田村 なんでもやるから？

紙谷 なんでもですね。

田村 なるほど。でも俳優さんもただスカウトされて、そのまま来ると、俳優学校を出ている人と両方いますものね。

小林 そうですね。

田村 やはり現場で覚えていくというパターンは、人を育てていく上での、少なくともドラマ制作ではそれが基本。例えば講義をするとかなんとかということではなくて？

紙谷 いや、講義はしないですね。

小林 どこの業界もそうだと思いますが、うちの業

界もそれだと頭打ちなので、ちゃんと話さないと分からないですし、それはどこもみんな直面していることなんじゃないですかね。だから「見て覚えろ」とは皆さん言わなくなったと思います。ちゃんと説明はする、これはこういう理由でやっているとか、それはするようになってきていると思います。

紙谷 でも、監督って、ほんと説明しないですよ。

小林 監督はちょっと遅れているよね。

紙谷 監督はほんとにしないです。プロデューサー陣は分かっているんですよ、言わなきゃ分からないっていうのが。でも監督は本当にやらない。

小林 まあまあ、そうだね。だから変わっていくと思いますけど。

紙谷 変わっていかなければ駄目ですよ。人が育たないです。

小林 うちも人員、スタッフ不足がずっと続いています。だから入ってもらえる業界にならなければ駄目ですね。

紙谷 そうですね。

田村 スタッフが当然のように動いていて、あの辺のコミュニケーションがどうなっているのか、ちょっと疑問だったのですが。結局、事前にある程度は話し合いで、「こういくよ」みたいなのは決まっているわけですね。

紙谷 そうですね。あと『フラジャイル』は慣れたメンバーだったからというのもありますね。意思疎通がしやすかったというか。「石川組」というわけではないですが、なんとなくお互い知っている人だし、話しやすいのもありました。小林祐介には、完全に私の部下なので「あれやれ」「これやれ」というのは言いやすかった。彼とも長かったので、お互いに何をしたいか分かるということもありますし。

田村 通信病院にロケにきたときも^{注9)}、ほとんどスムーズに、あまりいろいろ言わないで、トントンと次々に終わっていくので、そういうものかと思っていたのですが(笑)。

紙谷 石川監督も、ちゃんとだんまりを決めてやられる方なので、それはスムーズです。

田村 最初のうちは大丈夫だったけど、最後の解剖のシーンのときはさすがに、打ち合わせが必要でしたね。

紙谷 打ち合わせしましたね。

田村 どういう手順でみたいなものをね。こちらが

話したことを全部、すうっと理解されていくなあという印象がすごくありました。

紙谷 頭のいい人ですね。

小林 石川さんは医療物、慣れていますからね。

おわりに

田村 ドラマの制作現場では実にたくさんのスタッフがいて、それぞれの仕事に取り組んでいます(図12)。現場で怒号が飛び交うようなことはほとんどなく、粛々と撮影が進行していく様子は、自分が考えていた熱気のある「ものづくり」のイメージとはちょっと違いました。それはスタッフ一人一人が自分のやるべきことを十分に理解し、まさしくプロフェッショナルとして役割を果たしている、その共同作業の姿だったのです。そして、それぞれのスタッフが胸に秘めた熱い思いは、現場にいただけで私にも伝わってきました。

われわれ医療現場でも「チーム医療」の重要性が強調されていますが、ドラマ制作現場の仕事ぶりから学ぶべきものが多いと感じました。今日のお話でも、そんな現場の様子が伝わったのではないかと思います。

本日はお忙しい中、いろいろ楽しいお話を伺わせていただき、有難うございました。



図12 撮影が始まる前のスタジオの様子

多くのスタッフがそれぞれの仕事を進めている。岸の机(図7)の前にある壁を取り去って、その外からスタジオ全体を撮った写真であることにお気づきだろうか？

注 釈

- 注1) 講談社『アフタヌーン』連載 原作：草水敏、漫画：恵三朗
- 注2) 出演：長瀬智也、武井咲、野村周平、小雪、北大路欣也、他。演出：石川淳一、城宝秀則
- 注3) 山下智久主演、フジテレビ系、1st シーズン 2008年7～9月、2nd シーズン 2010年1～3月、3rd シーズン 2017年7～9月放映
- 注4) 主演の榮倉奈々が新人OL役を務めたドラマ、フジテレビ系 2010年1～3月放映
- 注5) 『フラジャイル』第10話 医療の巨悪に挑む！大逆転の幕が開く
* 武井咲演ずる宮崎の幼馴染が膀胱癌となり、治験薬の副作用で死亡したのを、宮崎が自ら病理解剖する、それを長瀬智也が演ずる上司の岸が、助手をしながらじっと見守る、というシーンがある
- 注6) 米倉涼子主演、テレビ朝日系、1st シーズン2012年、2nd シーズン2013年、3rd シーズン2014年、4th シーズン2016年、5th シーズン2017年、6th シーズン 2019年、各年の10～12月に放映
- 注7) 坂口憲二主演、フジテレビ系、1st シーズン 2006年4～6月、2nd シーズン 2007年10～12月、3rd シーズン 2010年10～12月、4th シーズン 2014年1～3月放映
- 注8) 割本の裏表紙には、撮影日のスケジュール表がついている。分刻みで、何時から何時まで、どの場面をどこ

で撮影するか、そこに参加する俳優もすべて一覧表になっている

- 注9) 『フラジャイル』第5話 僕の言葉で患者を救い出す
- 注10) 石原さとみが薬剤師を演じたドラマ、フジテレビ系 2020年7月～9月放映
- 注11) 笠原英城：フジTV [アンサンブル・シンデレラ] 監修から見えてくる薬剤師の仕事
モダンメディア わだい 66:36-40, 2020
https://www.eiken.co.jp/uploads/modern_media/literature/P36-40.pdf (2021.1.引用)
- 注12) 天海祐希が脳神経外科役を演じた医療ドラマ、日本テレビ系2020年1～3月放映 広瀬アリス演ずる専攻医(専門医を目指す研修医)が、疾患の説明役になっていた
- 注13) 武井咲が天才監察医を演じたドラマ、テレビ朝日系、2014年7～9月放映
- 注14) 『フラジャイル』第9話 忍び寄る魔法の新薬の影
- 注15) 「よくわかる病理学の基本としくみ」(田村浩一) 一般の方向けの病理の教科書 発行：秀和システム
- 注16) 『フラジャイル』第8話 天才病理医、最大のピンチ！
- 注17) 『フラジャイル』第6話 僕の診断が親子を救う！
- 注18) 『フラジャイル』第3話 嘘の診断は許さない
- 注19) 芦田愛菜、将来の夢は「病理医」日本テレビ系「スッキリ!!!」2017年4月放映
- 注20) 「病理外来」：病理医が病理診断を直接患者さんや家族に説明する外来